

第五十九回

静岡県保育研究大会

平成三十年五月十日 静岡市

静岡県保育研究大会は、県内東・中・西部の持ち回りで行われており、今年度は静岡市市民文化会館及びシズウェルを会場として開催しました。

「すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現を目指して」を主題とし、保育所・認定こども園の社会的意義と役割、保育実践などの議論を深め、積極的な意見交換が行われ、参加者同士がお互いに研鑽を深めることが出来ました。



主催 静岡県保育連合会・静岡県保育士会



この研究発表では、保育者が日々の保育の中で、子どもの学びの瞬間に出合いその成長、保育者の関わりから読み取れることを積み上げて研究報告としてまとめたもの。各園、関連施設、地域とのワークによる研究発表では、今保育所・認定こども園に求められていることが浮き彫りになったように見えてきました。これからも、子どもたちにいちばん近い保育者が、こどもたちの『今』に必要なこと大さなことを的確にとらえ、研究という形でより多くの大人や保育者に伝えていく力をさらに磨いていける場となれば幸いです。本大会が滞りなく、充実した研修の場となりましたことは、すべての関係者の方々のおかげとここに深く感謝申し上げます。

第一分科会

テーマ 【新たな時代の保育実践】

～すべての子どもにむけて～

発表者 ①熱海市 栄光熱海中央保育園

乳児主任保育士

松本佳奈子

②静岡市 矢部保育園

保育士 野原怜央那

③浜松市 公立保育園西ブロック

研修グループ

浜松市立雄踏保育園

保育士 平沢 陽子

浜松市立可美保育園

保育士 寺田 容子

議長 菊川市 ひかり保育園

園長 八木 智子

助言者 静岡産業大学経営学部

教授 漁田 俊子

記録者 菊川市 ひかり保育園

主任保育士 菅沼さと美

発表(一) 現代っ子に必要な運動発達と支援

～乳児期の個々の発達に応じた

体育実践と成果～

子どもの日常的な遊びの中で、運動能力の低下を感じ、乳児期から幼児期に必要な発達と具体的な取り組みを行う。乳児期においては、個々の育ちを大切にし、できる援助を行い、一、二歳ではバランス感覚を養う基礎を

培う中で、幼児期に多様な動きを取り入れた総合的な運動に繋がる事がわかる。三歳以上児の体操教室においては、保護者のアンケートで肯定的な意見が多く、継続していきたい。今後子どもたちの「今」を大切にし、達成感や満足感を味わえる運動遊びを積極的に取り入れていきたい。

発表(二) 新たな時代の保育実践

～すべての子どもにむけて～

～子どものおもいに寄り添って～

多様化する社会の中で子どもの主体性を尊重する事と、今体験し育てなければいけない事とを融合した保育実践が重要とされる。日々の様々な場面での写真を撮り、振り返りをする事で、思いに寄り添い丁寧な関わり of 大切さに気付く。「家庭」「地域」をキーワードに挙げたことで、保護者と思いを共有し地域との連携の必要性や日々の感謝の気持ちに繋がる。発達に応じ関わりを広めていく中で、子ども自身が学び、成長し、個々の「生きる力」を育てていくこと、そして子どもに寄り添う感性豊かな保育士でありたい。

発表(三) 不思議でおもしろい

～感性を開く自然あそび～

～自然遊びを通して豊かな感情を育てる～
海と山に囲まれた自然豊かな環境にある中で、日々の生活や保育にうまく活かすことができずにいた。地域で活動する方を招いてのネイチャーゲームや環境学習プログラムに参

加し保育者自身も多くの気づきや不思議、感動を学ぶ中、子ども達も意欲的に遊びを展開する姿が多くなる。自然の中で養われる思考力や豊かな感情、好奇心を大切にすることは幼児期に育てたい十の姿に繋がると考え、園での取り組みを深め家庭にも情報発信をし、親子で楽しめる環境づくりに努める。

助言者より

保育研究による保育の質の向上、保育者の資質向上という視点からテーマを撰んだ事が良い。実践を発表する時は、事前、事後をおさえておく事が大切である。アンケートにおいても同様である。実践記録用紙を統一したことで、複数の園での取り組みがわかりやすく、他園でも参考にできるものがあり良かった。個々の保育計画には一長一短があるため、迷ったときはまず実践すること、実践を踏まえ振り返りを行うことで質の向上に繋がる。



第二分科会

テーマ【配慮を必要とする子どもや

家庭への支援にむけて】

発表者 ①沼津市 霊山保育園

保育士 大竹めぐみ

②藤枝市

主任保育士 松尾ふみこ
ガゼルの森

③浜松市

保育士 青島 由衣
まるづかこども園

主幹保育教諭 守屋 友美

主幹保育教諭 中根 芳浩

議長 御殿場市 双葉保育園

園長 勝又 秀文

助言者 静岡大学教育学部

教授 香野 毅

記録者 御殿場市 双葉保育園

保育士 鈴木貴美子

発表(一) 配慮を必要とする子どもや

家庭への支援にむけて

～保育士・保護者・専門機関との

連携の中での保育～

家庭では普通に話すが、特定の中では話せない、声が出ないという場面緘(カン)黙児のAちゃんの母が、自ら資料を集めて園に相談に来たことから、保護者、保育士、専門機関との連携が始まる。診察に同行してアドバイスをもらうなど、情報の共有や保育士の研修によりスモールステップを積み重ねて、よ

りよい保育に繋がった。今回は保護者の理解により連携が出来たが、理解を得られない保護者に対する働きかけが大きな課題である。

発表(二) 配慮を必要とする子どもや

家庭への支援にむけて

～子どもの心と対話する保育～

経験不足、他害、衝動的行動などを起こす児童に対し、園全体の保育士からチームを作り、エピソード収集、ケース検討を行った。そこから見えてきた「友達と仲良くしたい」「人に認められたい」といった本児の気持ちに寄り添うような支援を考えることにより保育士との関係も良い方向へと変化した。子どもが抱えている困り感を見つけ、気持ち思いながら保育をすることで、一人ひとりが安心して園生活を送れるようにしていきたい。

発表(三) 配慮を必要とする子どもや

家庭への支援にむけて

～気になる子どもと保護者への関わりと

就学に向けて～

気になる子どもを持つ保護者へアプローチをし、専門機関との連携を図るが、保護者は最終的に診断やアドバイスを認めずに、繋がりを拒んでしまった。園は現在も専門機関と繋がり、全職員で助言を共有・共通認識とする事によって成果が現れてきているが、年齢が上がり、本児が困り感を持つ場面も増えている。就学に向けて、保護者も専門機関と繋がって本児と向き合い、少しでも良い方向に

進めるようにサポートをしていきたい。

助言者より

保護者支援のアプローチのタイミングは早いが良い。就学後ではショックが大きい。子どもにトラブルなく生活を楽しんで欲しいという気持ちから専門機関からもアドバイスをもらいたいという気持ちも伝える。専門的な事を取り入れる事により生活し易くなるという実感を持つてもらい、保護者の持つている悩みや生きにくさの支援など、孤立させない仕組み作りが必要。「成功事例を勇気に、でも成功事例をなぞらない」という思いが大切である。



第三分科会

テーマ【保育者の資質向上を図る】

発表者 ①三島市 梅の実保育園

副園長 佐藤 悟郎

主任保育士 石川 圭子

②静岡市 ルンビーニ保育園

園長 土方 宏明

③浜松市 たんぽぽ保育園

園長 山崎正太郎

議長 静岡市 月影保育園

園長 浅井 哲朗

助言者 常葉大学保育学部

教授 山本 睦

記録者 静岡市 城北保育園

園長 松田 剛

発表(一) 保育者の資質向上を図る

「言語・環境・音楽・体育プロジェクト」

より良い保育を実現するため「プロジェクト」という名の会議を毎月行い、現場での保育内容の見直しを行っている。プロジェクトは四つ（言語・環境・音楽・体育）の分野に分類され、三々四人のメンバーで構成されている。会議では、常に五領域を網羅すること念頭におき保育内容の改善に取り組んでいる。また、職員全員が毎日振り返りチェック表を記入することにより自分自身を見直し、資質の向上を図っている。

発表(二) 保育者の資質向上を図る

「保育者の意識とその変化について」

静岡市私立保育園長会に所属する十一カ園の職員から意識調査を行った。仕事が好きでやりがいを感じる「A」、仕事が好きだがやりがいを感じない「B」、仕事は嫌いだがやりがいを感じる「C」、仕事は嫌いでやりがいを感じない「D」の四つに分けて調査した。また、それらをどのような場面で感じるかを合わせて調査した。一日の中で「A」の状態であっても、保育が終わった後に「D」になることもある。なぜ「D」になってしまったのかを常に検証することにより、職場内の風通しが良くなり、好きな仕事にやりがいをもって向かうことができ、保育者の資質も向上する。

発表(三) 人事評価制度を使った

保育者の資質向上

「コンピテンシーに基づく行動目標とMBOを使った絶対評価」

コンピテンシー（仕事のできる人の行動特性）に基づく行動目標とMBO（成果目標）を使った絶対評価を用いて、人事評価を行っている。評価者と被評価者が面談を行い、自己評価と評価者の評価を擦り合わせて合意を形成しながら進めていくため、制度自体が組織のマネジメントツールとして機能するようになっていく。また、自身のパフォーマンスが明確に給料に連動する仕組みとなっているためやりがいを感じて仕事ができる。コンピ

テンシーとMBOの設定により問題解決の行動が習慣化され、保育の質の向上に繋がる。

助言者より

保育指針の改正により非認知能力の重要性が話題になっている。非認知能力とは、効力感・自制心・公共心であり、人・時間・場所の中に自分を位置付けて客観的に考えられるようにする能力。これからはこの能力を伸ばしていくかなければならない。多くの単純作業はAIに取って代わられる時代が来る。就学前教育にもっと力を入れ、保育者は与えられた人・時間・場所をいかに有効に使ってベストな仕事をしていくことが求められる。



第四分科会

テーマ【地域の子育て家庭への

支援の充実に向けて】

発表者 ①富士宮市立柚野保育園

園長 後藤 優子

②静岡市 るり保育園

保育士 鈴木 雅子

③菊川市 ひがし保育園

園長代理兼主任保育士 浅井 明代
管理栄養士 宮城 まみ

議長 袋井市 ルンビニ第二保育園

園長 乗松久美子

助言者 静岡福祉大学子ども学部

教授 永田恵実子

記録者 袋井市 めいわ可睡保育園

園長 徳永 洋子

発表(一) 地域の子育て家庭への

支援の充実に向けて

子どもと親が育つメディアとの

関わり方

核家族化などの家族形態の変化により、メディアに頼った子育てが浮き彫りとなった。子どもがメディアへの過剰な接触のために二十年程前、光過敏性発作が社会問題となった。そこで食事中はテレビを消し親子の会話を推進し、絵本やわらべうた、カルタなどに取り組みチャレンジカードを作成し実施した。親子が共に育ち合うふれあいを大切だと

考えた。保護者、支援センターの利用者へ情報発信を行い、今後も主体性を持って電子メディアを選択し判断する力を身につけていくように、取り組みを続けていきたい。

発表(二) 地域の子育て家庭への

支援の充実に向けて

地域に見守られる環境づくり

自然環境に恵まれ、地域の人たちが子どもたちと一緒に見守ってくれる良い環境であったが、近年核家族化により高齢者、地域の人たちとの交流が少なくなってきた。そのような中、園を介し親子と地域がより密接な関係を持ち、親子が安心して子育てができる環境にしたいと考えた。安全面を配慮し、六十五歳以上の方とふれあいサロンの交流を深めていった結果、子どもたちから自然と挨拶ができるようになってきた。今後は伝承遊びや地域貢献など子ども、保護者、地域の方との関係がより良いものとなるよう活動していきたい。

発表(三) 保育所利用家庭の子育てから

発信する子育て支援

コミュニケーションセンターへつなげよう

まずは食と生活リズム

人間の基礎づくりの大事な乳幼児期に「一緒に笑顔で子育て楽しもう」を合言葉に手間暇をかけまじょうと保護者に伝え続け、コミュニケーションセンターを通じて地域の親子にも発信をした。健康なからだづくりは

助言者より

地域の子育て家庭の捉え方は様々である。日々の業務に追われる保育士であるが、一連の流れに添って研究することは、振り返り、自己評価をするためには欠くことができない重要なことである。それらの取り組みを園内外において精査し改善していくことが、保育士の専門家としての力量アップに繋がり、子育て家庭への支援の充実が図られ「子どもの最善の利益」の目的達成へ一歩近づくのである。



第五分科会

テーマ【家庭や地域との連携による

食育の推進】

発表者 ①小山町立いきど保育園

主任保育士 勝又 礼子
保育士 渡邊 真希

②川根本町立桜保育園

主任保育士 青島佳代子
川根本町 徳山聖母保育園

保育士 中村ひとみ
③いわた保育士会 食育部会

袋井市立笠原こども園

保育教諭 岩清水彩花
磐田市立二之宮保育園

保育士 菊地 里紗

議長 三島市 三島ようらん保育園

園長 加藤 徳人
助言者 NPO法人こどもの森

理事長 吉田 隆子
記録者 三島市 中郷南保育園

園長 瀬川 尊也

発表(一) 食べるって楽しいな

～楽しく食べて元気な子～

まず「子どもが『食べるって楽しいな』と
思えるような環境は?」「どうしたら『食』
への関心が高まるだろう?」と探る事から始
め、栄養士にもアドバイスをもらい、地域や

保護者を巻き込む活動・関わり等、具体的な
取り組みを実践してきた。研究を通して子ど
もたちは、自分の手で栽培・収穫・調理など
の実体験をすることで、食材の営みを知り、
以前よりおいしさを感じられるようになった。

発表(二) ～心の栄養、身体の栄養～

栽培ものを使ったクッキング、柏餅作りや
魚の掴み取り、焼き芋会など季節の行事に合
わせてクッキングを行った。また、試食会を
設け保護者の方にも給食を味わってもらった
り、地元の食育推進協議会と交流したり、地
域を生かした取り組みや、様々な人とふれあ
いの中で「食べる事が楽しみ」という思いを
大切にしてきた。食育活動は、すぐに結果が
出るものばかりではないが、幼児期に味わっ
た物、経験した事は大きく、子ども達が成長
してからも、きつと心の中に残っていくと考
え、今後も食育活動を続けていきたい。

発表(三) ～めざせ!おはしめいじん～

正しい箸の持ち方が身につくことで、食べ
る意欲や自信に繋がると考え、保護者と連携
して、子どもが興味を持つような遊びを工夫
していきたいと考えた。実践を通して自分の
箸の持ち方が正しくなっていくと、子ども自身
が気付くきっかけとなった。子ども同士で声
を掛けたり、確認し合ったりすることで、正
しく箸を持つことへの意識が高まった。

助言者より

食育は過程が大事です。過程を楽しむ、食
材のプロセスを子どもに感じさせる、地域の
食材を大事にすること、地域の伝統的な郷土
料理を地元の人にも協力してもらい食育に活
かすことなどです。静岡県の食育の特徴は0
才からの食育です。0才の食育とは、離乳食
で、離乳食から食育をしていくことが大切で
す。子どもが楽しく食べるには、大人が笑顔
でいること。食育に大事なことは、継続させ
ること。親との連携、地域との連携なども大
切なことになります。



第六分科会

テーマ【子どものより良い育ちに向けた関係

機関とのネットワーク】

発表者 ①富士市 みどり保育園

園長 落合千衣子

②静岡市立こども園 薬科ブロック

静岡市立服織中央こども園

園長 福井 佳幸

③浜松市 ずだじこども園

保育教諭 武田茉奈美

保育教諭 鈴木侑里香

議長 藤枝市立岡部あさひな保育園

園長 種本はる美

助言者 常葉大学健康プロデュース学部

准教授 中村 俊哉

記録者 焼津市立旭町保育園

園長 小島恵理子

発表(一) ～子どものより良い育ちに向けた

関係機関とのネットワーク～

保育園は保護者の子育ての道筋をたてるためのサポートをあらゆる支援者と共にしていく役割を担っている。療育センター、小学校、介護施設等と連携をとると共に保護者もつと気楽に話せる場としての「ママのためのホットサロン」の企画運営協力者となり実施している。保護者が我が子の「その子らしさ」を肯定的に受け入れるためには、保護者自身が自己肯定感を持つことが大切であることが

わかった。今後も保護者が勇気を持てる援助の体制作りをしていきたい。

発表(二) ～多様な機関との連携と協働～

「静岡市子ども・子育て支援プラン」を新しく策定をしたことを基に、薬科ブロックとして地域と連携した、より良い子育て支援の今後の在り方についてのアンケートを行った。結果から、未来サポーターの役割や、併設されている園との連携、保健センターとの連携について課題をもち改善に努めたことで、各家庭の状況に添ったきめ細やかなアドバイスができるようになった。今後は子どもの育っていく姿をエピソードを交えて利用者に伝え、子育ての楽しさを感じられる機会を増やしていきたい。

発表(三) ～子どもを取り巻く環境を理解した

上での保育を目指す～

子どもの気になる行動は家庭での背景と関係しているのではないかと捉え、スクールカウンセリングから保育内容を見つめ直し、子どもと、保護者の変化について研究した。保護者の中には相談に一步步み出せない方もいるために園として、臨床心理士が講演する機会を設け、スクールカウンセリングの考え方を知らせた結果、新たな視点で保育や育児を展開でき、関連機関との連携や絆を深めることで広い視野で子どもと密接に関わることができることがわかった。

助言者より

自治体や小学校にもよるが、就学前の小学校との連絡会で現一年生担任や教頭に情報として知らせても、肝心な特別支援コーディネーターに伝わっていない場合もある。確実に伝達していただけるよう、確認しておく必要がある。小一学級崩壊と言われているので、クラス編成を考える上で具体的な情報は重要である。発表にあった「親が元気でないと子どもにも大きく影響する」は、まさにその通りである。子どものより良い育ちには地域での協力体制が不可欠である。保育園、支援センター、保健センター、民生委員他、家庭に対して何ができて、何ができないのか各分野で役割を明確にした上での連携が重要となる。



第七分科会

テーマ【保育の社会化にむけて】

～保育の営みを

いかに社会に発信するか～

発表者

①沼津市 しんあい保育園

園長 山本 重治

②静岡市 つくしんぼ保育園

園長 山下 純子

③掛川市 掛川聖マリア保育園

園長 岡本真理子

主任保育士 内山 裕子

議長

浜松市 くすのき保育園

園長 袴田 祐子

助言者

常葉大学短期大学部

教授 鈴木久美子

記録者

浜松市

くすのき保育園
主任保育士 太田みさえ

発表(一)

子育て支援センターの活動及び

他機関との連携を通して保育の

社会化を考える

地域の子育て家庭のニーズに合った情報の発信、支援が必要な園児に対して関係機関との情報共有等の連携がとれているのか、という点で社会化について考えた。支援センター職員、看護師、栄養士による育児講座の開催は相手のニーズに合った取り組みを提供していくことで子育て家庭とつながることができた。またサマリー（要約記録）を活用した医

療・療育機関との情報共有、情報提供は専門機関と園との相互の役割を確認でき、それらを通して安心して子育てができる地域社会づくりに貢献できていることを感じた。

発表(二) 園だよりで、地域とつながる

開園するにあたり地域の方から子どもたちの声や、交通面での危険についての指摘があった。そこで園の理解を深めてもらえるような取り組みの一つとして、園だよりの地域版を発行。園児の様子だけでなく、各年齢における発達課題についても一緒に載せることで、保育園の子ども、地域の子ども同様な発達を経て成長していくことを伝え、子育てのヒントと一緒に考えられるようにした。少しずつ地域の方に声をかけてもらう機会が増え、保育の活動の様々な働きかけに快く応じて頂けるようになり、地域の中に根付く園として、今後この取り組みを大切にしていく。

発表(三)

掛川市における

学園化構想の取り組み

掛川市は市全体の取り組みとして、平成二十五年より乳幼時期から中学校までの十五年間を見通した視点を持ち、同時に地域の方々の協力を取り込んだ学園化構想をスタート。中学校区の幼・保・小・中の職員で構成される各研究部会での情報交換、公開授業・保育への参加、地域の方のボランティアを積極的に取り入れた活動計画を設定することで、長期間のスパンで子どもたちの成長を

共に考えていく。小学校へのスムーズな接続、地域との連携等それぞれが互いの理解を深め合い、子どもはみんな育てていくという意識がさらに深まっている。

助言者より

本分科会のテーマに対して、現場の自覚と実践が進化していることを感じさせられた三報告であった。発表(一)は社会資源としての保育所の在り方が具体的に示され、発表(二)は園だよりの役割の再認識、発表(三)は地域ぐるみで子どもを育てるという先進的な取り組みの実践報告であった。この三報告から、保育所を核とした「協働（コラボレーション）」の実態と更なる可能性が見い出され、併せて保育者個人が人と出会い、関わり、繋がるなかで、それぞれの人を活かすことによつて発信力を高めていくのだということが明らかとなった。



第八分科会

テーマ【公立保育所・公立認定こども園
等の使命と地域社会での役割】

発表者

①長泉町立中央保育園

園長 廣田 利恵

②島田市立第一保育園

園長 田中 初江

島田市立第三保育園

園長 俣平 千鶴

③浜松市立中ノ町保育園

園長 鈴木 京子

浜松市立南保育園

園長 犬塚 弘美

議長

沼津市立西浦保育所

所長 吉田 里美

助言者

東海大学短期大学部

教授 徳浪 芳江

記録者

沼津市立金岡保育所

副所長 杉山 真里

発表(一) 今後の公立保育園の役割
と実践を考える

「子どもが輝き 子育てが楽しい 心ふれあうまちをめざして」を土台に、様々な取り組みをしてきた。行事や体験活動を通じて自分の気持ちを表現し、褒められ認められ、個々の自己肯定感を高めた。また、保護者の抱えている悩みや不安に対する相談や援助を行ない、普段の関りを丁寧にすることから、家族

とのつながりも広げ信頼関係を築くことができた。

今後も公立の役割として行政とのネットワークをつなげ地域と関わることで、みんなが子育てをする意識を高め、みんなの笑顔のために当たり前のことにしっかりと向き合っていきたい。

発表(二) こどもをまんなか
に、私たちにできること

合併・民営化を経てどういう子どもに育てたいかについて考えあうようになり、公立保育所として今何をすべきかを職員間で見直すこととなった。他機関や民生委員との関り、保育リーダー会や園内研修をする中で、連携ができ、支援の方法に広がりができ、子育て中の親へのアンケートでは、保護者の不安や市への要望などがわかり、今必要な支援が具体化した。

今後は保育の見える化を課題とし、子どもをまんなかにおいた保育をすすめていきたい。

発表(三) 公立保育園が連携・協力をとって
子育て支援を展開していくために

浜松市の核家族や少子化が進む中、公立保育園が地域社会での役割として行った取り組みについて発表された。

地域に根ざすところでは、民生委員や児童委員と一緒に活動を行ない、地域とのふれあいを通して連携やつながりを築いた。また、保幼小の接続では、幼稚園との交流や学校探

検、連携協議会での情報交換を通して結びつきを強めている。

今後も園内研修、出前講座、公開保育、交流意見交換会や四部会などでスキルアップをはかり、保育士の質を高めていきたい。

助言者より

公立保育所として生き残るには、多様なニーズに対応し、ネットワークの要になっていかなければならない。

公立保育所の価値を高めるために一人ひとり自覚を持って仕事に就き保育の質を高め、プライドを持って働くことが大切。子どもの成長を考えることに100%力を注いでいてほしい。

